
浮き舟、流れ

スグル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

浮き舟、流れ

【Nコード】

N1377B

【作者名】

スグル

【あらすじ】

浮き舟うきぶねながれ、24歳。高校教師。受け持ちのクラスのせいで、僕は教師を辞めたくなった。

1 話「僕が、教師を辞めたい理由」

俺、うきふね浮舟流は24歳。ながれ

中学時代は、野球部。

あの頃、中学生とは思えない球を投げれたので、周囲からは「他の人より球速が早い人」という異名で呼ばれた。

高校時代は、剣道部。

何故、野球から剣道になったのかと言うと、入った高校に野球部が無かった。

剣道の腕前は、2年目で副部長で副将を任されるほどの実力だ。

そのことから、周囲から「やたら、副が付く人」という異名で呼ばれる。

大学では、「アニメ研究会」というサークルに入る。

何故、野球から剣道、剣道からアニメ研究会に入ったかと言うと・・・

理由なんて無い。

親からは、「目を覚まして」という異名で呼ばれた。

ちなみに、大学で過ごした4年間の記憶が何故か無い。

以上の過去を持つ俺は、今年、やっと小さい頃の夢であつた国語の教師になれた。

就職先の高校は、盗んだバイクで走り出す奴も居なく、物が壊れることもほとんどない。

フィクションには向かない高校だ。

受け持ちのクラスは、2年D組普通科。
うん、本当に普通の顔ぶれの生徒たちだ。
悪そうな奴が、いなかった。
悪そうな奴は、大体、友達って感じのも居ない。
だが、世の中、普通が一番危ないと言われている。
あつ、言われてないか。

.....

現在は、6月である。
この月は、クラスの生徒たちが学校に馴れ、高校生生活をエンジョイし始めた時期。
生徒たちも教師の俺に、打ち解けてくれるようになってきた。
俺自身も教師として充実感を得はじめ、毎日楽しく過ごしている。
。。
はずだった。。

.....

6月のとある日。。
俺は、車で出勤している。
放課後、いつものように職員用の駐車場に置いている愛車、インプレッサの元へと歩く。
だが、今日はいつもと違う。
どこが違うかと言うと、愛車の近くに人が居る。
あれは、受け持ちのクラスの女子、新城蓮しんじょうれんではないか。

新城蓮は、クラスで物静かな少女。
友達が多いようだが、あまり騒がない。
彼女の自己紹介も地味だったという印象がある。

俺は、彼女に近づいてみる。

「どうした・・・」

ちよつと渋めに、言ってみる。

「先生・・・」

彼女が、俺の渋めの声に反応した。

うほっ・・・、この娘、意外に可愛いではないか。

「俺の車に何の用だ・・・」

更に、渋く言ってみる。

それにしても、本当に何の用だ。

こんな静かで可愛い娘が・・・。

思っていたとき・・・。

サッ！

「！！！」

俺は驚いた。

急に、彼女が抱きついてきた・・・。

まるで、レスリングの組み付きのように。

「先生！！！」

と、彼女が声を出す。

細い彼女の両腕が、俺の上半身に絡みつく。

「あっ・・・、えっ・・・」

あまりにも突然だったので、反応できなかった。

これって、あれか！

あれなのか！！

禁じられた恋・・・、とか言うあれか！！

そんなつもりで、高校教師になったつもりはないが・・・。
ソノ発想ハ、ナカッタワ。

たしかに、生まれた年月と彼女居ない暦が同一線上の俺には夢のような状況だが・・・。

「一体、どうしたんだ！」

あくまで、この状況を冷静を押し通す。

条例というトラップが、この現在社会にあるのだ。

うかつに、手を出すほど若くはない。

そう言っでやると、彼女がやっと俺から体を離す。

俺から離れた彼女が、下にうつむく。

すると、彼女の口が開いた。

「先生が好きなんです・・・」

そんな言葉を、彼女が言った。

漫画やドラマの世界には、多い言葉を彼女が言った。

俺は思わず、鼻水を噴出す。

その一言で、条例などがどうでも良くなった。

噴出した鼻水を手で隠して、俺は彼女を見つめる。

「新城君・・・」

思わず、俺は欲望を抑えきれなくなった。

すると、彼女が・・・。

「先生、目を閉じて・・・」

そう言う。

俺はその言葉に合わせるように、目を閉じた。

彼女は、目をつぶった俺に、なにをする気か・・・。

もしかして、唇と唇のドッキングか・・・。

今から、まさに人に教えを問う教師と、その教えを乞う生徒が接吻を交わそうとしよう・・・。

ブルブルーン！！

急に、車のエンジン音が、目をつぶってる俺の耳を貫く。
この音・・・。

この聞きなれたエンジンは・・・。
俺のインプレッサの・・・。

「先生、車借りますよ」

その声に、思わず目を開けた。

目の前にいた彼女が、居なくなっている。

そして、視線を変えると愛車インプレッサが動き出している。

俺から、インプレッサが離れ行く。

「えっ・・・」

なにが、なんだか解らなかった。

だが、窓から覗く運転席から、この状況の意味を理解する。

嘘だろ・・・。

運転席に、彼女が・・・。

ハンドルを握っている・・・。

もしかして思い、俺は自分の尻を触ってみた。

「ぎゃあああああ————!!!!!!!!!!!!!!」

俺は叫んだ。

ズボンのケツのポケットに入れていた、インプレッサのキーがない
ことに気づく。

……リプレイ……

サッ！

俺は驚いた。

急に、彼女が抱きついてきた・・。

細い彼女の両腕が、俺の上半身に絡みつく。

「あっ・・、えっ・・」

あまりにも突然だったので、反応できなかった。

そのせいで、彼女の手が、インプレッサのキーがある俺の尻ポケットに入っていたのに気づかなかった・・。

あとで調べたが、彼女の家は車の整備の請負の自営業。

しかも、所謂、峠族が集まる店で、ちよつと怖い系で速さを求める危険な方々が多く訪ねてくる・・。

そんな環境で育った彼女は、もちろん車に好きなる・・。

しかも、彼女の親父さんは、彼女に無免許運転させていたのだ・・。

だから、彼女は、このような形で勝手に俺のインプレッサを借りた・・。

インプレッサは、彼女の憧れの車だったから・・。

.....

「ふざけんなあああああー！！！！！！！！！！」

俺は走った。

走りました。

無駄だったけど、走りました。

追いつけるわけありません。

俺でも追いつける車なんて、リコール問題以前の問題です・・。

このあと、彼女はインプレッサを返してくれました。

丁寧に、レッカー車に載せてきてくれました。

なんて、行儀の正しい子なんでしょう。

僕は、教師を辞めたいです。

.....

それでも、続く・・。

2話「ホラーとプリンと私」

.....

俺のインプレッサ破壊事件は、彼女の親御さんが無料で車を直してくれるのと、彼女の親御さんが、あっち系の怖い人たちと関係あるらしいので不問にした。

彼女は、退学を免れた。

まさに、親の七光り。

一応、翌日の放課後に、教室に彼女を残し指導することにした。

「もう二度と、あんなことするなよ」

ありふれたことを言う俺。

「はい」

反省の色が、見えない新城。

女じゃなかったら、殴ってる場面だ。

そっぴや、昨日、彼女が言った・・・。

「先生が好きなんです・・・」

という言葉思い出した。

あの言葉は、俺から車のキーを奪うために吐いた嘘であろう。
だが・・・。

もしかして・・・、その言葉は嘘でなかったら・・・。
と、俺は邪推した。

一応、聞いてみるか・・・。

そう判断して、すぐに俺は声を出す。

「おい・・・」

ちよっと、緊張したせいかな、俺の声が震えていた。

その声に、彼女は首を向ける。

「なんですか・・・」

「えっと・・・、だな・・・。昨日・・・、俺のこと・・・」

好きって言ったよな・・・。

と言おうとした瞬間・・・。

「好きって言ったのは、嘘ですよ」

まだ言ってもいないのに、すかさず言われた。

俺は、鼻水を吹いた。

ああ、嘘だと解ってたさ。

しかし、「もしかして、俺のこと好きなんじゃ・・・」と期待したさ。
するさ。

男だもん。

「ああ・・・、そうだよね・・・」

俺はガクガクしながら、彼女の間を置かない言葉に回答した。
体が意思と反して、震えまくってる。

「先生、足震えてますよ・・・」

「寒いからね・・・」

「今、6月ですよ・・・」

と、的確に指摘され、俺は思わず・・・。

「うああああ！！！！！！」

泣き出して、この場から逃げた。

もう恥ずかしくて死にそうだ。

急な大声で、彼女が引いていた。

元はいえ、この女が悪いんだが・・・。

とりあえず、小1時間、職員トイレで泣きじゃくった。

.....

夕方になり・・・。

残業も終わり、一人暮らししてる自宅のアパートに帰宅して、この日の辛さを寝て忘れようかと思ったが、途中でコンビニでプリンを買ったので立ち直れた。

辛いときは、プリンだ。

これが、子供の頃からの俺式の立ち直り方だ。

甘い物が苦手な人と、虫歯の人には勧めないが。

夜も深まった午後の10時。

ビデオ屋から借りてきた映画、「エイドリアンVSプレゼンター」を、プリン食べながら観ていた。

やっぱり、ホラー映画は毛布に包まって、プリン食べながら観るに限る。

今日あった辛くて、恥ずかしいことも忘れさせてくれる。

本当に、プリンとホラー映画を作った人に感謝。

ピンポン！

普段、集金でしか鳴る事のないイヤホンが鳴った。

しかも、こんな遅くに。

こんな遅くに、集金に来たのか。

と思っていた。

それで、俺はパンツ姿で、ドアの方に向かう。

こんな遅くに、誰だ・・・。

と、イラつきながら、ドアにある小さな覗き穴を覗いてみる。
目を近づけた瞬間。

俺は、驚いた。

なんと、ドアの向こうには・・・。

俺の心を弄んだ新城蓮の姿が・・・。

.....

続く

3話「ゴム、空高く」

.....

新城蓮が、俺のアパートの前に・・・。

そのことに、俺は慌てて服を取りに走った。

部屋干ししてたズボンを履き、脱ぎ散らかしてたシャツを着る。
そして、慌ててドアに向かった。

玄関に着いた俺は、ドア越しの新城に向かって。

「こんな時間に、なんの用だ・・・」
と言った。

本当に、この時間になんの用なんだ。

夜に、男の部屋のチャイムを鳴らすとは・・・。
彼女の口が開いた・・・。

「とりあえず、部屋に入れさせてもらえませんか？」

な・に・を・い・っ・て・る・ん・だ・！・？

バカか、この女！

自分の言った言葉の危険性が解ってるのか！？

俺は、我慢に弱い人間であり、自分の欲望に弱い。

部屋に入れたら、新城になにするか・・・。

解ったもんじゃない・・・。

責任は持てん・・・。

だから、部屋に居られるわけないだろ！

.....

と、五分前の俺は思っていた。

人間とは、どこかで自分の意を反してしまう生き物なかもしれない。だから、環境問題が耐えないのだろう。

だから、リコール問題、不祥事問題が耐えないのだろう・・・。

新城が、俺の部屋のお気に入りのテーブルの近くに足を崩して座っている。

「エイドリアンVSプレゼンターなんか観てたんですか・・・。お茶か、なんか下さい」

そう、ビデオ屋の袋を手を取って言っている。

しかも、お茶を要求してやがる。

以上通りに、新城を部屋に入れてしまいました・・・。

僕は、なんてことをしてしまったのでしょうか・・・。

17歳の女子高生を、自宅の部屋に入れてしまったのです。

言ったとおりに、僕は欲望に弱い人間だと、再実感しました。

僕は、彼女を襲ってしまうかも知れません・・・。

台所へ向かい、彼女へお茶の用意をしながら、いつかは使おうと思っていた、とあるゴム製品をタンスから取り出して、ポケットに入れる。

これで、準備はオーケーだ・・・。

テーブルに肘を乗せる彼女に、お茶を出す。

お茶を出しながらも、俺は、すでに戦闘態勢に入っている。いつでも、出撃可能。

しかし、俺とて社会人。

とりあえず、なぜ、ここに来たかを聞かねばなりません。

「おい、なんで、俺んちに来た・・・」

今更ながらに、そう言った。

うん．．．

4話「爆音がごとく」

.....

宙に舞うゴムに、ロマンを感じている時・・・。

ブオオオオオオオオーンンンー！！！！！！！！！！

耳に風穴開けられそうなくらい、うるさいエンジン音が聞こえて来た。

こんな遅くに、馬鹿みたいに車を吹かす奴がいるか。
かなりの近所迷惑。

どんだけ頭の悪い不良だ。

と思った時・・・。

うるさいエンジン音が、心なしか一層大きくなって来た。
こっちに近づいて来る様な感じがする。

まさか・・・。

.....

まさかが、的中した・・・。

うるさいエンジン音を放つスカイラインが、俺のアパートの前に出
現した・・・。

直に聞くと、本当にうるさい・・・。

爆音のスカイラインが、俺んちの前に停車した。

俺の頭の中は、嫌な予感で一杯だ・・・。

うるさいスカイラインのエンジン音が、やっと止まった。

あの新城蓮が、俺に近づいてから最悪だ・・・。

なんで、こんなひどい目に遭うのだ・・・。
子供の頃、一回も、万引きさえしたことがないのに。
あつ、一回したことあるわ・・・。

.....

予想通りに、バカうるさいスカイラインに乗って来たのは、彼女の
親父さんでした・・・。

そして、現在、俺の部屋でタバコを吸っている。

俺は、またお茶の用意をしている・・・。

なんて、態度のでかい親父さんだ・・・。

顔に深い傷があるぞ。

あれは、落書きか。

あの親父さんの放つオーラ力は尋常ではない。

きっと、一公務員の俺では想像の出来ない修羅場を体験してきたの
だろう・・・。

だから、俺には、あの親父さんに・・・。

タバコ吸うな、車うるさいねん、あんたの娘は、

「ハードラックと踊ってるんじゃない」

か、あんたの娘萌えー！。

などと、言えるわけがない。

それにしても、あんなゴツツイ親父から、あんな娘が生まれるもの
なのか・・・。

俺は、親父さんにお茶を出して座った。

「おおつ、先生、悪いですな」

と、ゴツツイ親父さんが言う。

この親父・・・、タバコを、人のテーブルに押しつけて消してる・・・。
しかも、吸い殻をテーブル置きっぱなし・・・。

そんな親だから、彼女もこうなのか・・・。

あつ、あの小娘、いつの間にか、テレビのチャンネル変えやがった、ちきしょう。

お茶を片手に、親父さんは、例のインプレッサの件を話し始めた。

「昨日は、すいませんなあ・・・」

一応、謝罪してくれた。

ちよつと嬉しい。

壊した本人の娘は、俺のベッドの上で横になつてゐるぞ。

親父さんが来なかつたら、俺が仰向けに倒してやったのに。

どうやら、この親子二人は謝罪に来てくれたようだ。

そういうことだったら、予め連絡して欲しいわ。

「あつ、いえ、気にしていませんよ・・・」

本当は、気にしてるが、この親子には立ち去ってほしいので流すように言う俺。

「これ、お詫びのもんですわ・・・」

と、言つて親父さんが、持ってきたケーキの箱を渡してくれた。

ちよつと、これは予想外。

「あつ、すいません」

俺は、ケーキの箱を受け取った。

なんだ、いい人じゃないか・・・。

と、俺は思った。

すると、俺がケーキを受け取ったと同時に、親父さんが立ち上がった・・・。

「ほな、帰るぞ」

「はい」

えっ!?

彼女も立ち上がった。

えっ、帰るだと。普通、ここから少し話をしたり、俺が娘さんに注意したりする場面ではないのか。

ちよっと、マナーとして、おかしいぞ。

俺は、車壊されて、ケーキ受け取って終わりかい。

そう思っている隙に・・・。

「おじゃまりました」

バカ親子二人が、部屋から颯爽と出て行く。

啞然として、俺は、口を開けたまま、二人を見送った・・・。

勝手に車を壊され、勝手に部屋に入られ、勝手に謝罪して帰る・・・。
まさに、外道！

.....

また、あのうるさいスカイラインのエンジン音が聞こえてきた。
たぶん、ここから去ったのだろう。

俺は、あの二人の常識のなさ金縛り状態だ。

とりあえず、ケーキの箱を開けてみる・・・。

ショートケーキ、一切れだけだった。

俺は、思った。

教師やめよう。

.....

つづく

5話「ダメなものは、所詮、ダメなんだよ」

翌日、俺は校長室に居る。

中年太りの校長が机に体重を掛け、椅子に座る。

その校長の目の前に、俺は立つ。

「どうしたんだね、浮船君・・・」

という校長の問いが来た。

それに対して、俺は・・・。

「今日限りで、学校を辞めさせてもらいます！・・・！」
と、大声で叫んだ。

その声は、校長室全体に旋律の美しい調べのごとく響く。

更に、勢いで校長の机に辞表を叩きつけた。「それでは、お世話になりました・・・」

校長が状況が読めていないのに、そのまま、俺は校長室を立ち去る。
昨日のあの二人のバカ親子が来たときの俺も、こんな感じだったの
だろう。

もう新城の顔を見るのも嫌だったから、受け持ちのクラスに一言も
別れを言わずに立ち去ることにする。

自分勝手過ぎるとは思っているが、そんなことが、どうしても良くな
るくらいに、昨日の件に腹を立てていた・・・。

しかし、辞めるにしても・・・、いきなり過ぎたな・・・。

と、少し反省してしまったのが、俺の良心なのだろうか。

というか、これが普通感覚なのだろう。

それから、1年の暇な日々を過ごし、俺は都心から離れ、とある島に住んでいる。

あの事件があっても、教師の夢を捨てられずに居たため、この島の小さな小学校の先生をやっている。

この学校の生徒は、少ない。

だが、俺はこの少数の子供達と、日々向かい合って生きている。

毎日が、体当たり。

だけど、俺は、とても充実している。

辛いときもあるが、あのインプレッサ大破事件を思えば辛くなくなる。

そういう意味では、あの女に少し感謝せねば・・・。

いや、やっぱり、感謝はしない・・・。

.....

そして、ここに暮らしはじめ、7年経った。

さすがに、あの事件は、もう忘れた。

俺も、気づけば32のオッサンだ。

歩きたびに、周囲の人々から暖かく見守られ、

「先生、おはようございます」

と、日々挨拶される。

都会にいた頃、こんなに優しく挨拶されたことはあったであろうか・・・。

今日は、実に日差しが眩しい。

なにか、いいことがあるようだ。

そんな予感で、頭がいっぱいだ。

世の中は、嫌なことだらけだ。

俺の場合は、嫌なことから逃げた。

だが、逃げるが勝ちと言う言葉がある。

逃げることによって、人は新しい自分の道を見つけることが出来る。

それを、俺は証明した。

だから、今、とても充実している。

そう思いながら、俺は学校への道を歩く。

しかし、所詮、現実には小説より奇怪なり。

この後、俺は自分の認識の甘さに泣く。

新しい居場所だと信じた学校には、なぜか、新任の教師になった新城蓮が居る・・・。

所詮、世の中はダメなものはダメだ。

.....

完

5話「ダメなものは、所詮、ダメなんだよ」(後書き)

かなり中途半端で、些末な作りになってしまったことをお詫びします。。。物語を破綻させてしまった自分の力のなさを憎むばかりです。。。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1377b/>

浮き舟、流れ

2010年10月28日05時39分発行